

柳原白蓮における歌の変容と到達

—最終歌集『地平線』をめぐって—

Suffering and Maturation in Yanagiwara Byakuren's *Uta*

—On her Last Collected Poems, *Chiheisen*—

中西 洋子

Yoko NAKANISHI

キーワード：近代歌人、柳原白蓮、最終歌集『地平線』、長男の戦死、平和運動

Keywords: modern *tanka*, Yanagiwara Byakuren, *Chiheisen*, death in war of her son, pacifist movement

はじめに

近代の歌人である柳原白蓮の履歴および業績などに関しては、大方は知られるところであろう。しかし、あらためてここでその概略を述べておきたい。本稿の内容を理解しやすくするためである。

柳原白蓮は本名燿子。一八八五（明18）年一月一日、伯爵柳原前光を父、柳橋の芸妓りょうを母として誕生し、後に入籍して柳原家の次女となる。里子の幼児期を経て、九歳の時、子爵北小路家の養女となり、養父随光から作歌の手ほどきを受ける。華族女学

校に通学するが、一五歳（一九〇〇）で同家の養子北小路資武と結婚。京都に転居し、翌年功光を出産する。二十歳の年に離婚し、実家の義母初子による幽閉期間の後、二三歳で東洋英和女学校に学ぶ。この頃、義姉信子に勧められ佐々木信綱主宰の歌会「竹柏会」（歌誌「心の花」）に入門する。

二六歳（一九一一）で二五歳年上である九州筑豊の炭鉱王・伊藤伝右衛門と再婚、飯塚に住む。この頃より「心の花」に作品を発表し始める。地元福岡を中心とした知識階級や名流夫人等と交際、一

一九一五（大4）年第一歌集『踏絵』を上梓する。別府の別荘は華やかな文学サロンとなり、筑紫の女王と呼ばれる。一九一九年（大8）『几帳のかけ』『幻の華』を刊行し（34歳）、翌年戯曲『指鬢外道』を刊行。この演劇上演を通じて、社会運動を志す東大の学生宮崎龍介と知り合い、文通を始めるとともに恋愛関係に発展する。

一九二一（大10）年十月二十日伊藤家を出奔、同二三日『大阪朝日新聞』に燐子の「絶縁状」が掲載される。これに対する夫伊藤伝右衛門による手紙「燐子に与ふ」が同二四日から二七日にわたって掲載。また、両家の親族会議、裁判沙汰など紆余曲折を経て、一月離婚が成立する。いわゆる白蓮事件として大きな話題となった。

一九二二（大11）年三七歳で龍介との長男香織を出産する。一九二三（大12）年関東大震災に遭う。龍介と正式に結婚、宮内省より華族を除籍される。一九二四年小説『則天武后』を刊行。翌年長女露琴を出産する。また同年歌集『紫の梅』を刊行。以後龍介の社会運動家としての活動を支え、育児とともに病身の龍介に代わって生活費のための執筆活動を精力的にこなしていく。この間の主な著者として歌集『流転』『筑紫集』、自伝『荊棘の実』、小説『恋愛懺悔』『青春譜』などが刊行されている。また、一九三五（昭10）年歌誌『ことたま』を創刊し、主宰する。

一九三九（昭14）年『歴代女流歌人の鑑賞』、一九四三（昭18）年小説『民族のともしび』を刊行する。一九四五（昭20）年八月一日、鹿児島県串木野にて学徒出陣中の長男香織が米軍機の爆撃により戦死する。翌年NHKラジオに出演し、これを機に平和運動を始

め「悲母の会」を結成する（後に「国際悲母の会」を経て「世界連邦婦人部」に）。一九五三（昭28）年六八歳頃より一九六一年七六歳頃にかけて、講演のため全国各地を旅行する。この間歌集『地平線』（昭31）、自伝『火の国の恋』を刊行。また、この頃より緑内障のため徐々に視力を失う。一九六七（昭42）年二月二日八一歳にて永眠する。^①

白蓮はおおよそ右のような、数奇な履歴を持つ歌人であるが、稀にみる美貌と、大正天皇と従兄弟の関係にある華族出身であること、また、因襲のいまだ根深かった当時の社会環境に加え、世に喧伝される白蓮事件のヒロインとしてクローズアップされてきた。したがって作品などもそうした部分で広く知られ、評価されることの多い歌人でもある。作品でいうならば、この時期に刊行された『踏絵』や『幻の華』の世界に伺われるような、いわば閨秀歌人としてである。しかし、最近では後半生にも光をあてられ、再評価しようとする動きが見えはじめている。^② 筆者はすでに二〇〇九年三月より同歌人の作品についての再検討を試みてきたが、ようやく『踏絵』を読み終わろうとしている段階である。^③

そこで本稿では、長男香織の戦死以降の、晩年にあたる時期の活動が、最終歌集である『地平線』とその周辺の作品において、どのような結実を見たかを探ってみようとした。

一

まず、白蓮の後半生はどの時期から始まると考えられるだろう

か。大きくとらえるならば、やはり宮崎龍介との結婚後であろう。それは、自らの意志ではない二度にもおよぶ結婚に翻弄された日々から脱出し、つましいながらも心の通い合う夫と二人の子どもに恵まれた、家庭の主婦としての人生の始まりであった。『紫の梅』はその時期に生まれた歌集として記念すべきものであり、また歌風の変遷をみる上でも注目すべきものであると言える。その「あとがき」には次のように記されている。

ここに集めた歌三百首は、何れも私の新生涯に入ってからのものである。その以前のまだ本にしてない歌即ち踏絵及び、まぼろしの花、自選歌集のものおよそ一千首はノートのま、かの大震災にあつて皆焼いてしまつたのである。其の当時は惜しいことをしたやうにも思つたが、後から考え見るといつそ灰になつてしまつてよかつたと思ふ。それは多く恨らみ（ママ）と呪ひと悲しみの記述であつたからである。今一切の古い衣を脱ぎすて、すべて新しく自己の歩みを強くふみしめて行かうとする時にこの歌集を公けにすることは私の身にとつては意味深いものであらねばならぬ。

〔紫の梅〕聚芳閣刊 原文のまま 旧漢字使用

収録した三百首は「新生涯に入ってからのも」といい、「一切の古い衣を脱ぎすて、すべて新しく自己の歩みを強く踏みしめて行かうとする時」とあるように、自分の意志で獲得した人生をスタートしようとする、強い決意が文面に充ちあふれているのがみてとれるだろう。では、どのような作品がどのように詠まれているのだら

うか。

あ、けふもうれしやかに生きて生きの身のわがふみてたつ大地はめぐる

あなたふと尺にも足らぬ水の面に月はまどかに影おとしきぬ

われを生む神の使命の何ぞもおもふ目にしむ大空のいろ

〔大地はめぐる〕一二首の内

本歌集は本稿中に掲げる他に、「むらさきの梅」「おもひで」「春より夏へ」など一五の小題から成る。まず、右のような歌から始まるが、ここにこうして生きてある身の有難さと不思議さの思いを噛みしめると同時に、あらためて大地自然、風物に対する新鮮な感動が詠われている。二首目のように小さな水面に月影が映っているという、普段の何でもない身の回りの情景に心を寄せるゆとりも、ここには垣間見ることが出来るのである。『踏絵』や『幻の華』ではままならぬ日々や身の不運を嘆き、架空とも現実ともつかぬ恋に心を燃やすような主観的な歌が大半を占め、日常詠や叙景歌がきわめて少なかったことと比べるとこれは大きな変化と言つてよい。

また、燐子は大正一二年の関東大震災にも遭遇している。伊藤伝右衛門との離婚が成立した後、柳原家で監禁の身となり香織を出産するが兄嫁方に預けられ、その父親をめぐつての裁判などを経て香織は宮崎家に、燐子は柳原家の依頼により本郷の中野家本邸に預けられている頃であった。

ゆりかへしまたゆりかへす地ひゞきに競々として夜もいねられず

かゝるときわれをさがさぬはらからも悲しがりつ、夜を明か
しけり

夜となれば西も東もみんなみも紅々ともゆたゞおそろしき
いたづらに火焰の方をながめつゝ、知れるかぎりのいのちかぞ
へぬ

針一本糸一尺もたぬ身のいのちひとつを獲てかへり来し
いまこそはわが魂を手のひらのくぼみの中に入れたるこゝち
雨降れば今宵焼野にすてられしなき魂まよふ声かとぞおもふ

〔大禍日〕二八首の内〕

右のような作品を読むと、平成二三年三月一日に起きた東日本大地震の被災状況が生々しく甦ってくる。寄寓していた中野家はこの時焼失している。ここでは一、三首目のような、身をもって体験した災害の状況をリアルに描写する冷静な目と、五、六首目にみるように、救われた命への深いいとおしみと感謝の思いがおのずから融和した一連（二八首）となっている。五首目の「針一本糸一尺ももたぬ身の」の具体的な表現、六首目の「（わが魂を）手のひらのくぼみの中に入れたるこゝち」にみる卓越した比喩など、緊張感をもって迫る佳品が揃う。また、三首目や七首目では周囲への人々や死者への心やりと悼みに及んでいることも見逃してはならないだろう。一方では、誰もが肉親や知人の安否を互いに確かめようとする中で、実家である柳原家からはついに何の連絡もなかったという。二首目はその悲しみを詠んだ歌であった。しかし、このことが返って婚家の宮崎家に移るよい結果となったのである。

ともかく自然災害による希有な体験であるとしても、こうした機会詩の分野においてまさに現実根ざした、確かな目による歌の世界を拓きつつあったと言えるのではないだろうか。

意味をなさぬ幼き人の唄声もいつか言葉となりて日をふる

母は好きと頬をよせてくる幼子の小さき顔に日のてりはゆる

父ありて母ありてなほ祖母ありて愛の中なる子に涙おつ

〔幼きもの〕一五首の内〕

ひとりすれば離れ小島にある心地淋しけれども心足らへる

氷わるその手ぬくめて大なる瀬戸の火鉢をかい抱きけり

人ありて心うれしく人ありて心かなしきこれや人妻

〔看護日誌一六首の内〕

離れ離れたった夫婦親子が、ようやく一つ屋根の下で暮らすことになった。歌集中には「ふた親の情けをしらぬわれながら子のためによき母となる日よ」ともみえるが、肉親の愛情に恵まれず育った燐子にとって、育児にも夫の看護にも心満ちた日々であったろう。それは睡眠時間を削りながらの執筆活動や、夫の社会改革運動に共鳴して集まってきた若い人々の世話などを行いながらのことでもあったという⁽⁴⁾。子へそそぐこまやかなまなざし、病む夫をいたわり気づかう心がおのずと歌のかたちになったような、素直な詠いぶりである。もつとも「衣かへかろきひとへの肌さはり若葉の匂ひ身にこそばゆき（春から夏へ）」のような、従来燐子らしいやわらかな感性も失われてはいない。貧しくともいかに多忙な日々であろうとも、燐子には生まれてはじめて自分の生きる場所を見出した思いで

あっただろう。

それは「三千大千世界のひとりと身をなして此の世をかりのよとは思はず〔非思量〕」とある下句の、仮の世ではない現実の世であると詠んでいるように、確かな自覚の上に立ったものであるとも言えるであろう。かつては「天上の花の姿と思ひしはかり寐の宿のまぼろしの花〔踏絵〕」と詠んだ作者であった。『心の花』の旧派和歌的なしらべから、あるいはそれを保ちつつ、現実の生活に向きあって詠う態度が認められるという点で、『紫の梅』は意味深い歌集であった。

二

これに続く『流転』は一九二八（昭三）年五月刊行である。

生れ来しちひさき人の片笑くば三日目にして見出でたるかな
 子等にきかすこのまりうたも悲しやな母ならぬ人を母とせし頃
 傍らに吾子といふもの眠らせて女子の幸を知りそめぬわれ
 静かなり遠き昔の思出を泣くによろしき五月雨の音

（『流転』不二書房）

その多くを占めるのは、引きつづき母親として二人の子どもを愛情深くみつめた歌である。右の一首目は生まれたばかりの長女露琴を詠んだものだろう。母親らしい幸せに満ちた歌である。二首目も複雑な事情の中で育った幼児期を悲しみつつ、あらためて母であることの、やはり幸せを確認している歌であろう。三首目も同様の、技巧のない素直に心情のじみでた歌だ。四首目では昔の思い出の

かなしみを「五月雨の音」がやわらかに包んでいる佳作である。

同歌集には「坊やの心になりてよめる歌（二八首）」とある中に「妹をまたいぢめたと叱られた大袈裟な声でなくものだから」などもみえており、子等へそそいだ愛情がいかに豊かなものであったかを充分読み取ることができる。しかし、前歌集『紫の梅』に比べると、おだやかに素直に詠われているものの、その内容にも足りなさが残るのは否定できない。また、同年には『筑紫集』（万里閣書房）が刊行されている。これは『踏絵』『几帳のかけ』『幻の華』『指鬢外道』『みどり丸』など、飯塚での十年間に刊行した著書をまとめて一冊としたものである。従って『地平線』に繋がる歌集としては『紫の梅』と『流転』であるが、中でも『紫の梅』を重視したいのは先述した通りである。

さて、右にみた歌集と重なる時期、大正末から昭和初期にかけての嬋子の活動の一つに吉原の娼妓をかくまい、その廃業と社会復帰を助けたということも忘れてはならない。たとえば吉原の郭を脱出して救いを求めた娼妓・春駒に関して、次のような文章がある。

娼妓廃業までの実務は岩内（筆者注 龍介の友人で労働総同盟の紡織組合長・岩内善作）にまかせた白蓮だったが、そのあとの社会復帰には彼女の努力の跡がにじむ。まず雑誌『婦女界』に「郭を脱出して白蓮夫人に救はるゝまで」を書かせる（大正一五年七月号）。これをもとに『光明に芽ぐむ日』初見世から脱出まで』が白蓮の序文つきで文化生活研究会から出版されたのが、大正一五年一二月。その後『婦人公論』などに掲載され

た文と、読者からの反響を加えて『春駒日記』が前著と同じ文化生活研究会から出版される（昭和二年十月）⁶。

他にも千代龍の記事などが当時の新聞紙上に報道されており、この娼婦救済活動は世間にかなり知られていたようである。夫龍介の影響にもよるだろうが、親身になって世話をする背景には、前半生でなめてきた尋常ではない人生体験があったことを思わせる。とりわけ、十年間の飯塚時代に京都から野口さと、おゆう姉妹を呼び寄せ、夫伝右衛門の夜の相手をさせたこと、宮崎龍介と出奔する直前、博多の名妓ふな子を身受けしていることなどと、⁷ けて無関係ではないだろう。こうした活動に関わる歌として、

嵐つよく雷さえも鳴るときをおかして来る悲しき客人

しどけなき伊達巻きすがたこれやこの幾多の人にまかせたる身

か

吉原の遊女がおくる長き文涙おとして見はしたれども⁸

右はこうした折の、事実即しての作であるが、歌そのものの出来というよりも、社会批評的な新側面をうかがわせる点で貴重である。やがて娼妓の自由廃業が認められることになる。

三

さて『地平線』の作品群において読者の心を最も引きつけるのは、やはり、長男・香織の第二次世界大戦における戦死とその折の悲歌である。香織は早稲田大学学生として鹿児島県串木野に学徒出陣

中、米軍の爆撃を受けたのである。終戦のわずか四日前、八月一日のことであった。当地に近い岬、長崎鼻には香織をしのんだ「右も海左も海の色蒼く沖の小島に想ひはふかし」の歌碑が立つ（昭和三年串木野市が建立）。同歌集は「万象」「悲母」「至上我」「人の世」「旅」「去来」などの小題をもつ三一七首からなるが、「悲母」六十首が香織を偲ぶ歌群である。

かへり来ば吾子に食はする白き米手握る指ゆこぼしては見つ
英霊の生きてかへるがありといふ子の骨壺よ振れば音する

ふと見れば三日月のかげ子のあらぬ世にあへりけり老いはせま
るに

蒼空に一片の雲動くなり母よといひて吾をよぶごとし

泣くことをたのしみとする日もありてありふる命おごそかなる

も

秋の日の窓のあかりに亡き吾子がもの読む影す淋しき日かな

もしやまだかえる吾子かと脱ぎすてのほころびなほす心うつろ

に

夜をこめて板戸たたくは風ばかりおどろかしてよ吾子のかへる

と

身にかへていとしきものを泣きもせで何しに吾子を立たせやり

つる

母は好きとほほにより来し子のぬくみふと思ひいづる日向ぼこ

して

焼跡に芽吹く木のありかくのごと吾子の命のかへらぬものか

かたみなれば男仕立をそのままに母は着るぞも今は泣かねど
病上りあまへて母を離さぬ子もてあましつつひるげもたべず

(『地平線』⁹)

このように挙げていくと、きりのないほど心打たれる作が多い。
『紫の梅』や『流転』に見たような、ようやく手に入れた幸せな母親の歌に比するまでもなく、その悲しみははかりしれない。しかし一方、悲歎に暮れながらもそれに溺れることなく堪え忍び、じつと向きあっている目がある。しかも表現は具体性をもって悲しみの情とひびきあい、また修辭的な技巧の入る余地なく、いずれも単純化された詠いぶりである。

愛息の戦死によるこうした母親の悲しみは、敗戦の翌年一九四六(昭21)年五月、NHKラジオの放送を通じて訴える機会を得るが、それはやがて戦後の平和運動への参加へ繋がることになり、同年内に「万国悲母の会」を結成するに至る。個の悲しみを共有し、反戦に繋げようとする婦人達の運動である。こうした社会活動との関わりは、娼妓の廃業と社会復帰に努力した場合と同様、やはり龍介による思想的影響も当然考えられ、またその助力も大きかったに違いない。

一九四九年四月二三日付けの『婦人民主新聞』には、「誰故にこの嘆きを」と題して宮本百合子によせた、次のような燐子の記事が掲載されている。

(前略)今は、言論の自由時代となつたのだそうだけれども私共にはまだ割れ切つてものをはつきりいうことが出来難い。あ

の日、日の丸の旗を肩にして「大君のへにこそ死なめといつて出て征つたあの子の姿は、胸に焼きつけられて今もなお痛む。あのおとなしい子が人一倍子ほんのうの両親の家を、不平一つ言わず勇ましく門出をした、あれは一体、誰故に誰に頼まれてああしたことになつたのか——と。(中略)

思いかえせばあの戦争中の協力一致の精神。命も、宝石も、金も惜しまなかつたあの時のあのですさまじい皆の心、それと同じものが世界平和のために湧き上らぬものかしら、この故にこそ天界で働らいていると信じて息子と地上においては人として同じ目的に協力したいと念じている。これが我子を犬死させない唯一の道だと思っているから——¹⁰。

右の文面には子を失った悲しみに加えて戦争への反省と、世界平和への祈願がせつせつとひびく。これに答えて宮本は同紙面に、

(略)『あのですさまじい皆の心、それと同じものが世界平和のために湧き上らぬものかしら』といふ言葉は、燐子さんににちりよつて、その手をとらせたい心にさせる。そうなのよ、燐子さん。わたしは、どんなに燐子さんから、真実なそのひとことをおききしたいと願つてあただらうそのひとことが、全日本の女性の胸の底にこだまとなつて響くことを願ふだらう。(略)
あなたの愛がそんなに大きく、そんなに母として深い傷になは疼いてゐるのに、もう一遍、その傷のいたみからかくはしの香織を生んで見よう、と思ふことはおできにならないかしら。今度は戦争の兇□と非人間性に向かつて抗議し、行動する、けふ

といふ歴史の時代における香織を。(□は判読困難の活字)
と、燐子の訴えと願いに深い共感を示しつつ、平和運動としてぜひ実践してほしいと激励している。社会主義作家であり、敗戦後婦人運動の指導的な役割を果たしている宮本の言葉は、運動の端緒にいったばかりの燐子にとって大きな力づけとなったことであろう。

「悲母の会」は後に「国際悲母の会」となり、「世界連邦平和運動」に発展して婦人部長となり(一九五三)、全国各地を講演する旅の日々が始まる。同平和運動には湯川秀樹夫人スミも参加しており、永眠した一九六七(昭四二)年の『ことたま』にはその弔詞が掲載されている(第33巻第3号)。この運動に繋がる歌碑「原爆のみたまに誓ふ人の世に浄土をたてむみそなはしてよ」が東京目黒区の羅漢寺に立つ。

四

「旅」を中心として『地平線』の作品に詠み込まれ、また注記された多くの地名は、この講演旅行の時のものと必ずしも一致するわけではないが、大半は重なっていると考えてよいだろう。作品の配列順に列挙すると、北海道(後志、札幌、月寒、石狩、旭川、十勝平野、根室、狩勝、北見)をはじめとして、庄内、山形、鳥海山、最上川、富士三島、浅間、駒ヶ岳、八ヶ岳、伊那、蓼科、天龍川、猿倉温泉、佐渡、両津、安宅の関、長良川、伊那波山、伊良湖岬、伊勢、関の地蔵、鈴鹿山、阿漕、志摩、奈良、梅尾、堺、高野山、武丈公園、讃岐、博多、筑紫の海、豊後の海、などとみえる。ほぼ全

国に及ぶ四十箇所を越える数である。その講演の目的と旅の日付を知ることはきわめて困難であるが、たとえば、『ことたま』には「白蓮先生旅行ご旅行日程」として「九月二十一日(阿蘇)御出発 九月二十六日迄滞在(この間に歌碑除幕式悲母の会出席)」などの記事がみえる。(第20巻第7号 他に同巻1号、21巻8号、23巻1号、同巻3号などにも散見)

また、『ことたま』には燐子の執筆による随筆が毎号掲載されている。その内容には旅行記が多く、その目的のほとんどがこの平和運動のための講演であったことが知られるのである。話の内容は例えば、「午后観光ハウスで五十人ほどの集り。例によつて、世界連邦運動に私が入会したわけと、漫談じみた歌の話。私が生きてきた七十年の変遷。とりとめもない話だったが、酒井家に返つたら、又九州からの戻りに、もう一度よつて欲しいとのこと、神戸を十七日にと約束してしまつた。(第24巻第4号)」というものだった。多くは歌や人生体験などについての親しみやすい話題であり、平和運動そのものに関する型苦しい内容ではなかつたようだ。また、私的な祝賀会や歌会などにしても必ず講演活動を兼ねての旅であつたようでもある。『ことたま』第22巻第2号の「一月の旅」を見ると、

この頃は、世界連邦婦人部の仕事が追々本格的になつてきた。悲母の会解消問題の起きた時、だから先生は、歌の事さへすれば他の事は何もしなさるなど、意見された。併し自分の運命の流れというものがある。私も香織が生きて帰つて来たらば、大方冬は炬燵にあたつて、孫の相手をしてながら、好きな本でも読

んでいて、それで私の人生はおしまいになる筈だったろうけどふとしたことから斯うなつてしまった。

とあり、次のような日程の旅が記されている。本文に沿って箇条書きにすると、

一月十九日。東京を発つ、本日熱海市で世界連邦結成会式があるので、下中理事長も私も出席、筒井節夫人同伴。

廿日、午后二時、熱海発はとにて大阪に向う。

二十一日、正午スエヒロにて、御主人の接待を受け、二時労働会館の世界連邦大会出席。

二十二日。堺市の英雄の姉夫婦がやつている福姓園養老院に行く。

二十三日、新大阪ホテルで世界連邦婦人部の結成式、所謂大阪一流婦人の集り、多く川島夫人に依る。東京よりもここが日本の婦人部として大きく動くのではないかと。

二十四日、信修教団に行く、金光教の流れを扱^マむ教団であるが教主は非常な人格者と見た。

二十五日、(略) 四天王寺の女学校の講演、(略) 夜は、夜学校の男の学生へお話。

二十六日、(略) 電車で香里大八公園に行く、川島夫人の別荘八十八人ほどの婦人の集。三時頃すませて京都へ。

二十七日、十一時、都ホテルの中外(日報) 社主の祝賀会。

二十八日、川島夫人、田辺さんと、白蓮を囲む会(のため) 中外社に行く。

二十九日、東京に居た時から申し渡されていた姫路へ川島夫人と行く、労働会館で世界連邦の話。(略) ここで二度講演して姫路の宿に、流石に寒いのでお湯に入つて床についたが、バスガールのため講演してくれとて九時過ぎ迎いくる。自分の体も少しはいたわつていいかと思ひ、川島夫人に代わつて頂く、
二月二日、ツバメで帰京、

講演旅行は一九五三(昭28) 年頃から増えはじめるが、ピークは丁度この頃からの二、三年である。右の場合には実に二週間におよぶ講演旅行であった。この年一九五六(昭31) 年、すでに燦子は七十一歳となつていた。一九五四(昭29) 年以降一九五九年までの十日以上の長旅は、『ことたま』誌上に見る限り、右を含め八回におよぶ。さらにこの間の三、四日から一週間程度の旅も加えると、体を休める間なくの日々であったことが充分に想像できるだろう。そのひたむきな旅は、

巡礼の心してゆく旅なれば北のはてにもわがゆくものかとみずから詠う巡礼さながらの、死者への鎮魂と平和への祈りに強く支えられた旅であった。

どこの国の誰がぬれ居る雨ならむとほくに見ゆる雨雲低し
ききほれてしづかに涙たるるなり山河草木みな声放つ

道のべの鼻かけ地蔵けふばかりしみじみとして拜まれにけり
遠つ祖のなみだに見たる秋の空佐渡はけぶりて小雨となりぬ
いにしへのゆかりの人は居らねどもその日に似たり今日も雪降る(山形)

かがり火はやみの奥より見えそめて近づき来る鵜飼舟いくつ
旅の歌は属目の叙景歌が多く、また訪ねた地名が詠み込まれるこ
とも一般的な特徴である。「旅」九三首も例外ではない。右では二首
目、三首の、山河草木の放つ声に耳を傾けたり、鼻かけ地藏に立ち
止まるなど、祈りや自然への畏敬の念のあらわれた作からは、おの
ずと「巡礼の心」に通じるものをうかがわせる。また、一首目の「ど
この国の誰がぬれ居る雨ならむ」や四首目の「遠つ祖のなみだに見
たる」、六首目の「いにしへのゆかりの人は居らねども」などにみる
ように、此岸彼岸を超えた人懐かしさの思いのこもるような叙景歌
である。燐子の持ち味の發揮された秀作であろう。

五

このような過酷とも見える無理の多い講演旅行は、やがて燐子の
目を苛み緑内障に侵される結果となった。その発病について、一九
五九年一月岡山、九州、大阪への旅に同伴した都さちが「随伴記」
に次のように記す。

二十一日、先生昨晚はお目が痛くて眠れなかったとの事今朝
早速目医者さんに見て戴いたら「緑内障」との事、これは大変
だとシヨツクを受けたけれど、手当が早い上に、今は良い薬も
あるから全治なさるそうで、やっとホツとした。

（『ことたま』第25巻12号）

また次の号には、燐子が「一眼に光を失って思つたこと」を載せ
ている（第26巻第1号）。そこには「耳で見、目できくということ

も、はっきりわかりました。結構な体験、ありがたい事です。」とあ
る。しかし、この頃より次第に視力を失っていき、一九六一（昭36）
年七六歳で両眼を失明するに至る。従つて講演旅行からも文筆活動
からも遠のいていくのであるが、作歌は永眠の前年まで続けられ
た。

手と足を眼になしておぼつかない今日の一日をようやく暮らしぬ
（第28巻第4号）

眼を病めば思い出をよぶ声のして今を昔の中へのみ居り

身のまはりうたさびしき明け暮れやそこはかとなき丁字の句

ふ （同第28巻第4号）

なべて皆物音たえし真夜中は声ならぬ声のなにか聞こゆる

（同第29巻第7号）

さらに、『短歌研究』（一九六六年）には

月影はわが手の上と教へられ淋しきことのすずる極まる

昨日と言ひ今日とくらしてうつそ身の明日の命をわが生きむと
す

そこひなき闇にかがやく星のごとわれの命をわがうちに見つ

いつしかに八十とせ生きてつかの間の露のいのちのことはりを

知る （『短歌研究』11月号）

辞世の歌というべき「いのち」十首からの抄出である。当然のこと
ながら視力の喪失を白蓮は最初から素直に受け入れたわけではな
かったようだ。晩年親交のあった詩人の松永伍一によると、肉眼が衰
えても心願が冴えてくればいい、と言った北原白秋の言葉につい

て、

「でもね、どうせ盲目になるなら幼いときの方がよかった。この齡では立居振舞いが不自由で、そのたびにいらいらするのよ。心眼どころじゃないわね」

と話したという。文筆活動を続けてきた者にとって、その苦しみや嘆き、苛立ち、不安感などは視力ある者の想像をはるかに超えた不自由さであったろう。しかし、最晩年に松永が会った時、

「掌に月の光が映ってるのが見える」

と話してくれたのが救いであった、とも述べている。⁽⁸⁾一連の作には、命や生きることへの限りないとおしみがあふれる。また、あらゆる夾雑物を取り除いた、澄み切った歌境をみる事が出来るが、それはまた、松永の言う右の部分と細やかにひびき合う浄化された抒情世界でもあった。こうした歌境に到達する背後には、彼女の宗教観との関わりをも視野に入れる必要があるが、稿をあらためて考えた。いずれにしろ、前半生もさることながら、後半生で味わった最愛の息子を戦死させた悲しみ、巡礼そのもののような平和運動の旅と視力の喪失など、数々の試練を受け止めることによって到達した歌の世界であったと言えるのではないだろうか。

以上、柳原白蓮の最終歌集『地平線』において、息子香織の戦死を嘆く歌を中心に、その生き方とともに拓いた歌境をとらえようとした。なお、本稿を進めるにあたり、川涯利雄(華)・伊楚子夫妻に香織戦死の地とされる鹿児島県串木野に案内いただいた。また、飯

塚在住の白蓮研究者・宮嶋玲子さん、同「白蓮想」女主人・有松道子さん、さらに青木春美さん(こころの花)の助力を得た。記して感謝申し上げる。

【注】

- (1) 『柳原白蓮展図録』「略年譜」(二〇〇八年一〇月・朝日新聞社)
宮崎路斐・聞き書き宮嶋玲子『白蓮 娘が語る母燐子』(二〇〇七年五月・旧伊藤佐右衛門邸の保存を願う会)
- (2) 野々山三枝編『柳原白蓮略年譜』(『短歌』一九九二年三月号)
注1の「白蓮 娘が語る母燐子」
- (3) 中西「焼跡に芽吹く木のあり―柳原白蓮の後半生と歌の展開」歌誌『相聞』38号(第44号)(二〇〇九年三月)二〇一一年四月・相聞の会
- (4) 注1の「柳原白蓮展」図録61p
- (5) 松平盟子『紫の梅』と『地平線』をつなぐもの(『短歌』一九九二年三月号)
- (6) 川内紀「吉原の白蓮」(『彷彿月刊』19巻2号二〇〇三年一月・弘隆社)
- (7) (6)に同じ
- (8) 永畑道子『恋の華・白蓮事件』(一九八二年一月・新評論)
- (9) 長沢美津編『女人和歌大系』近代篇、及び『ことばのつばさ詩歌句』(二〇〇八―九冬号所収二〇〇八年二月・北冥社)
- (10) 尾形明子・長谷川修監修『戦後の出発と女性文学』第4巻(二〇〇三年五月・ゆまに書房)
- (11) 『ことたま』を所蔵するのは早稲田大学中央図書館であるが、バックナンバーが揃っていないことによる。
- (12) 『ことたま』第20巻4号 同第21巻第11号 同第24巻第4号 同第24巻11第号 同第25巻第6号 同第25巻第8号 同第25巻第12号

(13) 松永伍一「白蓮女篋」〔『短歌』一九九二年三月号・角川学芸出版〕

(平成23年11月9日受理)

Abstract

Yanagiwara Byakuren's "Chihei-sen (The Horizon)" published in 1956 as her last collected poems includes the whole work written after "Ruten (The Vicissitudes)" and "Tsukushi-shu", both published in 1928. Death of her eldest son, a student soldier, Kaori in 1945, just before the end of WWII is marked as one of the biggest misfortunes for this period of her life. The main part of this collected poems which runs to 60 pieces titled "Jibo (Affectionate Mother)" is therefore an elegy for Kaori, which expresses such deep grief that surpasses workmanship, and allows her to achieve a new poetic mood different from any traditional lyrical expressions. This paper attempts to see how she reached this matured poetic mood with some reference to the time and society, focusing on her social activities and comparing with her earlier works.

Keywords : modern *tanka*, Yanagiwara Byakuren, "Chihei-sen", death in war of her son, pacifist movement

キーワード : 近代歌人、柳原白蓮、最終歌集『地平線』、長男の戦死、平和運動